

事実を学び真実を問う

学 長 水 谷 幸 正

八〇年代に入った。二一世紀はいわば指呼の間である。二一世紀の人類はいかにあるべきか。さらに、世界は、日本は、社会は、政治は、文化は、等々、識者によって真剣に論議されている。わたくしどもも、大学における学問の研究と教育がいかにあるべきか、について、脚下を照顧しつつ、二一世紀を視野に入れて、大学の新しい役割りを常に問いかけている。

そのことの具体的な一例として、大学教育における一般教育と専門教育の関係についての問題がある。三〇年間、一般教育の名のもとに、人文、社会、自然の三系列に分けて、それなりの教育効果を挙げてきたことは事実であろうが、いまやそれが空洞化され形骸化していることもまた事実である。一般教育と専門教育の相互滲透ということが、これからの課題である。本学においても、全学の教員による一般教育科目の担当ということとをめぐして、その組織と機能を検討しつつある。わたくしは、一般教育のありかたが、良きにつけ悪しきにつけ、今後の大学教育を決定づけるであろうとさえ思っている。

右はほんの一例にしかすぎない。そのほか、大学改善のために、多くの問題をかかえている。それらをつ

一つ着実に解決してゆくことが、世界文化の向上、人類福祉の増進につながることは言うまでもないが、しかし、制度や組織の改革だけにおわるならば、ほんとうの成果をあげることはできない。やはり、わたくしどもは、常にその原点を忘れてはなるまい。学問することの原則を見失ってはならないのである。

「学びて思わざれば則ち罔^{くら}し。思つて学ばざれば則ち殆^{あやう}し」というあの孔子の言をいまさらながらに味わいつつあるこのごろである。学問とは、事実を学び真実を問うことである。事実を学ぶ、ということだけに終つてしまうならば、それは学問ではない。事実を学ぶのは真実を問うためである。孔子のいう「思う」とは真実を問うことであろう。学んでも問うことがなければ学んだことにならない。いつまでたつても無知蒙昧である。さりとて、学ぶことを怠るならば、思うこと、すなわち真実を問うことが不可能である。まず謙虚に学ぶことが必要である。馬齢を重ねるにしたがつて、思うことの多くして、学ぶことの少ない殆さを反省せしめられる。孔子はさらに「吾かつて終日食せず、終夜寝^いねず、もつて思う。益無し。学ぶに如^しかざるなり」とさえ言っている。

よく学ぶことがよく思うことに通じる。もちろん、真実を問うということはた易いことではない。真実を問うというその対象はさまざまであろうが、結局のところは、価値創造の主体である人間の真実を問うことにある。学問とは人生の真実の意味を問うことである。

このことをふんまえ、さらに、仏教の目的が、真実に生きることであると深く自覚しながら、わたくしどもは本学の限らない前進を期しているのである。